

第6期町田市民文学館運営協議会第1回議事録

- 開催日時 2022年11月22日(火) 18:00～20:00
- 開催場所 町田市民文学館 第六会議室
- 出席委員 会長 渡邊正彦
副会長 長尾洋子
委員 貝原俊明
委員 草刈大介
委員 中垣里子
委員 名取玲子
委員 若宮和男
- 欠席委員 委員 阿部哲也
委員 熊谷玄

- 事務局出席職員
市民文学館担当課長 野澤茂樹
担当係長 加藤剛
担当係長(学芸員) 神林由貴子
主任(学芸員) 山端穂
主任(学芸員) 谷口朋子

- 資料
資料1 「町田市民文学館あり方見直し方針」に基づく2022・2023年度の検討内容について
資料2 文学館事業体系図
資料3 2022年度 市民文学館担当の「仕事目標」
資料4 開館からの利用状況の推移
資料5 2022年度事業実績
資料6 町田市民文学館ことばらんど所蔵資料一覧
資料7 2023年度展示計画
参考資料 浅野いにお展企画書
参考資料 パークミュージアム

○ 次第

開会

- 1 委員自己紹介
- 2 事務局自己紹介

議事

1 町田市民文学館運営協議会会長、副会長選出

以下のお二方に決定

会長 渡邊正彦

副会長 長尾洋子

2 討議

(1) 町田市民文学館のこれまでの経過と 22・23 年度の検討内容について

【事務局】資料 1～6 について説明

(2) 2023 年度展示計画について

【事務局】資料 7 に沿って説明

【議長】ここまでの内容に質問はあるか。

【委員】事業の収支の構成比とか計画はあるか。どの事業を柱としてやっているか。どういうコロナ禍の影響があるか。例えば、この事業は何割くらいで、この事業は何割くらいとか、ざっくりでよいので。

【事務局】一番大きいのは展示事業で事業費の半分くらい、残りが教育普及、資料、広報などである。

【委員】その中で教育普及事業は収益事業ではないのか。

【事務局】基本的にはほぼ無料で行っている。

【委員】展示も 1 本しか有料でない。予算の配分だけで収益化していないということか。

【事務局】そのとおり。

【委員】会議室貸出はどうか。

【事務局】会議室は有料で貸し出している。

【委員】会議室貸出と有料展示が収益事業とすると、予算比、支出比で何割くらい戻ってくるのか。

【事務局】考え方としては受益者負担が基本で、収益化するというよりは利用する方に費用の一部を負担していただくということである。

【委員】会議室貸出を伸ばしていきたいとか、収益性を高めていきたいとかいうよりは…

【事務局】利用率を上げていきたいと考えている。

【議長】本日は、後半にニューノーマル時代に展示施設に求められることをテーマに、委員の皆さまそれぞれの立場からお話をいただきたい。

…休憩… (浅野いにお展見学)

(3) ニューノーマル時代において展示施設に重要なことはなにか？

【議長】

まず、委員の皆さまお一人お一人にフリートークで構わないので、現状の認識や展示施設について、現在お考えになっていることや展望についてお話をいただきたい。

【委員】

私はもう少し規模が大きい展覧会の仕事をしているが、ニューノーマルという言葉が口にしたことがない。大空間の中でモノを見せて、お客さんに来てもらって、お金を払ってもらう（無料のケースもあるが）という展覧会という表現のしかた、サービス、事業で提供できるものに関していうと、コロナの前と後とあまり変わらないと思う。むしろ、コロナは関係なく、展示の内容とあり方自体が曲がり角に来ていたと思う。コロナ禍の影響があって、美術館、博物館でのイベントの入場料が上がったり、デジタルデバイスがあったり、時間制が一斉に導入されたり、いろいろ遅れていたことに対して、それが標準化していった。ニューノーマルをあえて言うのであれば、それまで何となく衰退していたようなことに対して、巻き戻して正常化していかなければいけないという、内側の関わっている人たちに対しての気構えというか、そういうことかと思う。

【委員】

展示を考えて行く時に、観に来た人が受動的に観るだけでなく、どれくらい参画していくか、巻き込まれていくかという時代に明らかになった。文学館で良い文学に触れることも大事だが、言葉を紡いでみる経験とか仕掛けとか、観に来た人がもう一步突っ込んで何かそこで自分も言葉を紡ぐとか発話するということもある。福岡女子大でのワークショップで、彫刻作品を見て、感じる匂いや音を想像してみて、最後にその彫刻作品にストーリーをつけてみましょうということをした。浅野いにお展でも観に来た人が自分の言葉を紡ぐとか、そこにたくさん出ている台詞の中から一番気に入ったものを一つ選んでみるとか、何かアクションが一つあるとか、そういう巻き込まれがあると発信する。青年層の発信は、自分がそこに対してのエンゲージがないと、ただ撮ったものをただ発信してくださいと言っても発信しない。二子玉川でのEND展は「死」について考える企画展で、マンガが効果的に使われていたが、「あなたにとって死を別の言葉に言い換えると」みたいな問いがあって、そこに皆付箋に書いて貼っていく、それがきっかけで外への発信になる。観に来た人が参画する形が入っていくと面白そうだと思う。基本的には、文学館は町田の人が一番足しげく通っている方がよい。地元の人には行かないけれど外の人ばかり来るとなると、器になってしまってコンテンツでの呼び物をしているだけになってしまう。町田の人が観に来て、そこで何か参画して、それがSNSも含めて外に漏れ出て人が集まってくるみたいなことが起こるには、来た人のアクション、観に来て帰りますにプラスワンあるとよい。ちなみに年齢層はどうやって把握しているか。例えば、浅野いにお展はどうか。

【事務局】

アンケートをとっている。有料展の回答率は約70%で、浅野展の場合は、20代が52%くらい、10代が16%、30代が15%で、全体の約85%は10代から30代が占めている。なかでも20代が圧倒的に多く観に来ている状況である。町田市民とそれ以外の割合では、町田市民は12%、残りの88%は市外の

方である。浅野さんの人気を反映していると思うが、全国から来ていて、都内から約 25%、その他の全国からは約 20%である。これまで中高年層が中心であった当館としてはかなり特殊な年齢構成になっている。

【委員】

ターゲットを若い人にすればよいかということそうでもないところもあるが、起爆剤にはなる。町田の人は年何回か観に行つて、関係ない企画展も観に行つて、みたいな状態になっている方が良いが、いきなり遠藤周作だととっかかりがないので、自分との結び目がない。そういうところで自分なりのストーリーを考えてみましょうとか、遠藤周作の中のどこかに結び目を作ってあげるみたいなことをする。結び目のない状態で来ると、興味があれば来るがなかなかその先は難しい。一見すぐに興味がない人に興味の継ぎ目を作るコンテンツとか工夫が出来ていくと面白い。その仕掛けが考えられると良いと思う。

【委員】

前回から話している中で、それを活かしてやったのが「57577展」で、つながるといふ文学館の新たな試みで好評だった。参画する仕掛けを作るのはとても有効だと思った。また、地元の年配の人間がリピーターとしてこの文学館に足を運んでいるかといふとかなり残念な状況だといふことを、私は地元の人間として感じている。無料だと来るけど有料だと来ないといふのは顕著だし、こういう若い人向けになると年配の方はパッと来なくなる。なかには、最近若くは若い人のばかりやっているとという声も聞こえてくる。その方たちも実際に来てみたら面白かったといふ経験をどこかでしたい、作りたい。作れると広がるだろうなと思う。それをどうしたらよいかずっと考え続けている。

【委員】

ニューノーマルという言葉も聞いて「何だ、これ」といふ状況だが、子どもたちは自分の身近なものがとっかかりの始まりだと思ふ。今日の浅野さんの展示を見ても 20代が多いのは自分の生活感にあつた、同じ共感する人間がこういうものを観に来るのかなと思ふ。小学生、中学生になると自分の作品が出るとか、版画美術館でいつもしているが、学校単位で行つて、「あつ、〇〇君の作品が出ている」とか、そういう喜びが多いと思ふ。今年の夏にショートショートの指導をして下さつて、子どもたちも物語の作り方を経験した。たまたま中学の体験といふことで小学六年生が行つた時に、国語の先生がショートショートをして下さつた。うちの卒業生が面倒見として生徒会の役員をしていたので作つてみさせたら、私は授業でやったからといふ面白い物語の続きを作つて、自分の言葉から発想した言葉をどんどんつなげていく。やはり経験したことでどんどん広がっていく。自信をもつて広がっていく。そういう試みでやった作品が飾つてあつたりすると、小中学生も何か一つをテーマにしてこの話の続きを作ろうみたいなものがあつて喜んで来るのではないかと思ふ。ただの作品の展示会ではなくて、ワークショップ的なことがあると広がりが出てくるのではないかと感じた。

【委員】

昨年就任した館長（世田谷文学館）がニューノーマルを掲げている。リアルとオンライン双方向で、オンラインは発信を外に向けて、それと同時にリアルなものを大切にする。町田市は遠藤周作という強力なコンテンツを持っている。こういう大きな財産をどう活かすか、これをどう大事にしていくのかということ、アピールを含めてやっていくことが我々の大きな役目の一つではないかと常々考えている。外に向けてというのと同時に、それは逆に地域であったり学校であったり、もしかしたら小さいかもしれないが、むしろそういったところをきっちりと丁寧にきめ細やかにやっていくことの方が、外でアピールするという意味で非常に重要なのではないか。町田市は様々な財産を持っているので、そういったところをアピールしていただくのは、同じ業界にいるものとして心強いし、先駆してほしいと思う。

【委員】

事業報告を受けて、「57577展」が良かったと改めて思った。SNSの活用は、発展的な活用の仕方も含めて、継続して追求していくべきだと思った。数値で図ることのできない意義ある領域を開拓していくような文学館、文化施設であるという、そういう存在感を保っていけると良いと思う。また、展覧会に対してどういう層が来るのかという時に、世代というものが強調されるのが日本の社会だということを改めて痛感している。ターゲティングというのは様々なセグメントが想定されるが、何故か日本の社会の場合は、世代・年齢とジェンダーが2大要素になっている。世代が前面に出され過ぎというのはむしろ問題ではないかと思っている。世代間の断絶というものがいろいろところで悪影響を及ぼしている。例えば、大学生を見ている、自分と同年代の人たちとしか普段付き合わないために、発想の幅とか将来展望の幅が狭くなっていると感じることがある。今年の夏に竹上妙さんの展覧会があって、その関連で和光大学の学生が参加するような形で絵本ピクニックという企画をいただいた。そのイベントに参加してくれた保育園児のお父さん、お母さんが「普段こういうお兄さん、お姉さんたちと接する機会がなくてとても良かった」とおっしゃっていた。普段自分たちがいかに狭い世代の中でしか付き合いがなかったかということを実感した例である。

【議長】

これまでのところでご意見やご質問があれば出していただきたい。

【委員】

世代の話は面白いと思う。文学は世代を超えて楽しめるという言葉は好きではないが、色々な楽しみ方が出来るということだと思う。例えば、浅野いにお展がある時に「シニアのための浅野いにお教室」などを一緒にやったら、シニアの人も浅野いにおを楽しむことができる。逆に「10代のための遠藤周作」みたいなものがあるといいと思うし、楽しみ方はいろいろとある。しかし、それを繋げてあげないと、コンテンツごとに、これは50代用、これは20代用となるのはすごくもったいない。それぞれのアスペクトで始めるけれど、最後

は繋がれるみたいことがあると、そこが混ぜられる。しかし、混ぜられるものはただ置いておいても混ざらない。それは、そこに切り口や問いの置き方で、自分事として浅野いにおを思えた時とかで、それも複雑なことよりシンプルな事の方が良かったりする。いきなり「自分らしい彫刻を作ってください」といっても彫刻は作れないが、「彫刻に自分らしい色を塗ってください」とか「彫刻に自分らしく名前を付けてください」とかにすると自分事になって、自分にとってこれは何だろうという出会いになる。すごく20代的なコンテンツだなどと思っているものが60代の人から面白がられる。文学の面白がり方から、町田市若い人は文豪のことがすごく詳しいみたいになっていくと面白い。その面白がり方を発信していくのがとてもワクワクする。「遠藤周作のこの小説を読んで主人公の絵を描きましょう」とか、問いと参画のしかたで世代を超えて面白がれると良いと思った。

【議長】

今日は第1回目でいろいろなご意見をいただいた。今後さらにこの運営協議会を重ねていく中でさらに深めていけたらと考えている。

最後に、「芹ヶ谷公園芸術の杜パークミュージアム」とニューノーマルの関係について、事務局より説明していただきたい。

【事務局】

参考資料に基づいて説明

【議長】

何かご質問、ご意見はあるか。

【委員】

自宅の最寄り駅が田園都市線の南町田グランベリーパーク駅で、駅名から連想されるように緑豊かな公園と、それに隣接して、従来はショッピングモールがあったところと一体的に再開発するという方向で完成した。その中にまちライブラリーというのがあり、鶴間公園で伐採した木を使って、机、椅子、テーブルなどのインテリアを作るなど、工夫して公共スペースを作っている。芹ヶ谷公園と文学館の関係を踏まえる上で参考になるかもしれないと思った。

【議長】

今日出たご意見は事務局にまとめていただき、このテーマについても次回の協議会でさらに深めていければと思う。

3 その他

(1) 第2回運営協議会スケジュールの確認

【事務局】

今回は2月28日（火）か3月7日（火）のどちらかで、本日欠席されている委員のご都合を確認したうえで日程を決定して、皆様にご連絡を差し上げたい。